

Title	新出聖徳太子伝二種
Sub Title	
Author	牧野, 和夫(Makino, Kazuo)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1983
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.20 (1983.) ,p.393- 418
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000020-0393

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新出聖徳太子伝二種

牧野和夫

中世の聖徳太子信仰の隆盛の様は、これを書物に辿る

ときは陸続として生み出された太子伝記・注釈書の種類

並びに伝本の多さを以て知ることができるが、伝記・注

釈書類の中には、書名と若干の佚文を今に伝えて散佚し

たものは勿論、書名すら伝わることのない佚書もあつた

か、と思われる。延文五（一三六〇）年釈重懷撰『太子

伝見聞記』に、

伝日記伝説分

人名也キシヨウ 奇蹤書三卷 補闕記一卷 菩薩伝一卷作者 思訖伝一卷鑿

廿人弟子隨一也 七代記橘寺在 明一伝二卷伝教大師依憑 事略一卷作者

武天皇此障子繪ヲ記置名障子伝云々 障子伝河内太子法隆寺広隆寺 松子伝不流布間法隆寺之

失墮歟作者不知之 日本伝燈太子伝 平氏伝本一卷後代開 旧事本記

卷云々
……(略)……惣太子伝別ニ作者等十二伝在之云々

橘寺法空上人太子伝明匠新勘文此人被撰集 同時鎌倉住仲範是

抄此内一卷法隆寺ノ日 拾遺集六卷 古今目録

有明匠管有上洛法空上人ト対面談義云々太子伝正流此兩人近代明匠云々

葛上郡万歳土居トコノ住能登房云物アリ平氏伝見開七卷広注之二又十二卷在之広略二本

名能登伝仮名マシリノ伝也此外秘伝口伝等秘決二卷口決二卷 合四帖又在之自家立之題目多在之謀説非一仍非依憑本云々

(内閣文庫蔵〔近世初〕写本一冊に拠る)

とあるが、引用最終行に認められる「能登カ伝」は、葛

下郡万歳土居に住した能登房なる者の手に係る太子伝

で、中世の万歳氏・当麻・熊野信仰等を併せ考える時、

無限の興味を喚起せしめるものであるが、未だ伝本の報

告をみない。重懷が「謀説非一仍非依憑本云々」と記し

ていることは、逆に能登伝の看過しがたい流布の實際を

物語っている。後考に俟つべき伝記の一つであろう。能登伝とともに伝暦の末書に引用されること多く、しかも未だ伝本の報告をみない太子伝に、『見聞記』も記す「松子ノ伝」と呼称される一書がある。「非依憑本」と峻拒された「能登カ伝」に比して、太子存命中の人、大鳥部(父)松子の撰に係る権威ある伝記と信ぜられ来たった点は甚だ相違している。『見聞記』に拠れば、世間に流布せず、法隆寺僧もこれを披見しえなかつたらしく、「失墜歟」とも記している。又、叡山文庫蔵〔享徳三・四年〕写『太子伝』にも「余^{リニシテ}秘^シ之^ハ師^ハ弟子^ニ不^レ伝^ス親^ハ不^レ見^ス子^ハ空^ク秘^シ失^ハレリ」とあり、その存否については、南北朝から室町にかけて既に疑わしい点があった、と思われる。鎌倉期に遡っても、書物として「松子ノ伝」が行われたかどうかは、不明である。西本願寺蔵徳治二年積覚如写『上宮太子御記』一軸(斯道文庫蔵マイクロフィルムに拠る)は、本奥書に「正嘉元歳^{丁巳}五月十一日書写之^ノ愚禿親鸞^{八十}五歳」とあり、親鸞八十五歳、正嘉元年(一二五七)に書写したことが伺えるが、『三宝絵』中巻の序と第一話「聖徳

太子」を抄録、これに「日本記・平氏撰聖徳太子伝……」と出典注記を加え、次に佚書の積珍海撰『日本三宝感通集』巻第一並びに太子御廟ノ註文出現ノ事を付加するものである。この『御記』の「太子御廟ノ註文出現ノ事」に「松子伝云」として「大慈大悲本誓願愍念有情如一子」に始まる、所謂廟崛偈を掲げるが、やや遡って成った法隆寺願真撰『聖徳太子伝古今目録抄』も、「太子廟堀内石面自注記文^{松子写此}令流布」として同様の廟崛偈を記し(荻野三七彦氏考定・昭和十二年刊本に拠る)、尊経閣蔵〔弘安九年〕写『聖徳伝大略抄出』も又、松子、堀内に入り親しくこれを見たとして廟崛偈を記す(斯道文庫蔵マイクロフィルムに拠る)。鎌倉中・後期には、「松子伝」は、廟崛偈に付随して名のみ存し、書物としての実際を知るものは殆どいかなかった可能性もあろう。

しかし『古今目録抄』が「松子伝者或十卷或十二卷^{云々}」御廟内^ノ文者第十卷文^{云々}」とも「或松子伝一卷^{云々}」とも云い、「二卷伝云^{松子伝}敏達天皇即位二年癸巳聖徳太子降誕^{云々}」と記し、「松子伝云一卷伝^ト」と記すところを見る

ならば、鎌倉期に、廟幅偈を録し、太子誕生の年を「癸巳」とする「松子伝」なる書の存した可能性もある。文保本系太子伝（文保年間成立）にも、数ヶ所、「已上松子」の注記があり、文保本系太子伝撰述の際の資料として活用されていたか、とも推測しうるのである。又、室町期の注釈書『太子伝玉林抄』（飯田瑞穂氏編『法隆寺蔵 尊英本』）太子伝玉林抄』昭和五十三年刊に拠る）に「仲云松子伝文云大日本国者雖辺卑小国イルカセニシ神護地也汝等何等忽イカセニシ拒皇化コハテ……」とあり、仲（範）云を信ずるならば、鎌倉佐介谷に住した南家の儒者仲範が「松子伝」を見ていたようであり、「松子伝」が鎌倉時代末期に極く少数の人士の目にのみふれて、秘説（深秘）と化していたことも考えられるのである。そうした所に、前述した如く南北朝・室町期に「失墜歟」「空ク秘シ失ヘリ」と存否に疑わしい目を向ける説の行われる原因もあったのであるが、一方で『聖徳太子伝拾遺抄』を始めとして諸末書・注釈書の多くが「松子伝云」或は「松子伝ニ見タリ」として、種々区々の異説を掲げるようになる。このことは、「太

子ノ舎人」と信ぜられ「梵天化身」とまで伝説化した松子に、仮託した書物が繰り返り返し世間に行われていたらしいことを示すものと推しうるのである。

ここに紹介する二種の太子伝は、従来報告をみない大鳥部（文）松子撰と題した室町期の写本である。「聖徳法王三国伝燈灌頂伝」・「上宮太子御遺言記注」と内題は異なるものの、これらも又、中世に行われた一種の「松子伝」と云うべきであろう。

両書の書誌を簡単に記すならば、

一、久遠寺身延文庫蔵〔室町末期〕写『聖徳法王三国伝燈灌頂伝』大一冊。

表紙欠。寸法は、二八・二×十八・〇。糹。仮綴、元は粘葉装か、と思われる。両面書。内題「聖徳法王三国伝燈灌頂伝一卷 大鳥部松子撰」。無辺無界、字高約二六・五糹、每半葉八行、各行二八字内外字数不等、稀に一・二の点あり。十五丁・裏より下端に約二・〇糹幅の薄紙を横長に貼り、本文一・二字を丁寧に透写・補筆する。天地やや截断。後欠の可能性あり。五丁・表左下に蓮牌型

墨印（六・六×二・〇糎）「身延文庫」と。内容は、「竊忤上宮法王者即南岳大師之垂應」に始まり「為伝受子弟愚童不顧後賢嘲哂抄出秘決伝記是称上宮法王灌頂伝而已」と終る序に明らかな如く、種々の秘説・口伝の抄出であり、金沢文庫蔵「鎌倉」写『上宮菩薩秘伝』等の秘事・口伝に通ずるものであるが、『秘伝』に比して甚しく詳細である。廟嶺偈も「一仏法伝垂跡結偈文」と標して、「欽明天皇聖観音」以下「甲斐駒馬頭尊」と甲斐駒に至るまでの本地仏を配し、「彼此各別皆方便……広濟群生証妙覚」の八句を挟んで「大慈大悲本誓願」に続く特異な形式を示す。善光寺如来との往復書簡も又詳しい。『金沢文庫古文書』のなかに、聖教類の書名を挙げたものが見え、そのなかに、「太子灌頂伝事」という一項のあることが報告されているが（林幹弥氏『太子信仰』昭和四十七年刊）、本書は書名・内容からして、そうした「太子灌頂伝」に連なる貴重な一書と思われる。※（追記）

二、南河内郡野中寺蔵〔応永三十年頃〕写『上宮太子御遺言記注』一軸。

縹色後補表紙（二七・四糎）、打付「上宮太子御遺言記注」と墨書。見返しは鬱金色無地。総裏打。内題「上宮太子御遺言記注／大鳥部父松子撰」。無辺無界、字高約二三・七糎。朱墨両様の一・二点、豎点、送り仮名・訓み仮名等あり。朱はやや後筆か。八紙継（一紙幅約四五・〇糎、第八紙のみ、三七・五糎）。太子廿五・卅五・卅六・卅七・卅二・卅一の各歳・「惠慈法師日」とした一文の順に記し、第三紙本文末に「已上七大事畢」として、改めて順に太子卅・卅六・三歳等の記事を加え、「又日」として弘法大師の言を記す。引き続き「上宮太子御遺言記注相承」と題して、上宮太子に始まり、「慈円僧正——阿倍大臣大納言宿奈」等に至る血脈相承を記し、「当寺絵所阿倍大臣九代之子孫也」と注して了る。勿論、矛盾多いものである。奥書は「此七大事子孫一人令相伝但依有御器用御所望以別議奉授彼方就中御往生後者可有二本所御返有御誓文」云々／応永卅年癸卯六月廿九日 書写之畢／絵所上座覚慶〔花押〕とある。巻首に重郭長方形墨印（三・九×一・八糎）「野中

寺」と。内容は、太子毎歳の記事の中より、数歳を選び、特に秘して「七大事」と称し、一子相伝をうたったものか。従って太子伝の諸末書に認めることのできない特異な内容を有しており注目される。「当寺」が何れの寺を指すかは不明である。覚慶も又未詳、後考を期したい。

※(追記2)

*

本稿の成るに際して、閲覧・翻印を御快諾下さいました身延文庫・野中寺各位に対しまして厚く御礼申し上げます。

凡例

一、ここに翻字するものは、次の二本である。

『聖徳法王三國伝燈灌頂伝』〔室町末期〕写、大一冊

久遠寺蔵

『上宮太子御遺言記注』〔室町〕写、一軸、野中寺蔵

一、翻字に当り、次のような方針に従った。

1、漢字はなるべく正字体を使用するが、別字体・略

体文字をも併用した。

2、虫損等による判読不明箇所は、□で示した。

3、重書等は※1・※2等として、後に一括して注記した。『灌頂伝』は、書誌に記した如く薄紙を貼り

透写・補筆する箇所多く、特にこれを注記しなかった。

4、各丁の終りは「1オ・」1ウの如く示した。

5、『遺言記注』には朱墨両様の訓み仮名・音訓合符等が施されているが、本誌の制約上、音訓合符は省き、訓み仮名も、朱墨の区別はつけなかった。

聖徳法王三國伝燈灌頂伝一卷

大鳥部松子撰

竊帑上宮法王者即南岳大師之垂応救世菩薩之变作彼勝鬘夫人

之来誕也夫四弘之船度四生之溺衆三明之光普耀照六趣之癡闇矣

所謂在大唐衡山坐禅苦行不動身心而送九旬之一夏誦經論談不合

眼目而經百日之夜隱是以陳隋兩帝作為大師唐濟歸為能化故救世

菩薩之弘誓不唐槍故答三世之宿願任七生之加行終感和國之幼生

為日域之化生奏讚西天之仏勸弘諸惡莫作之教法講渲東來之妙法

普示捨邪歸正之正路終以建立四十六箇之伽藍即化度一千三百之□」^{1才}

因茲慈雲広覆三千之含識德光遠照六趣四生之迷類也其而□七生行化東海三生之來誕彼此伝曆万枢而輒以難製記然而

為伝受子弟愚童不顧後賢嘲哂抄出秘決伝記是称上宮法王灌頂伝而已

聖德太子胎内○其七月七夕語日礼礼秘釈云初阿

者 万法本来不生之義不生即發生機興即生之義也是則不動法性本

来寂〔類カ〕一切有情性徳正了因之三明之種子是也次阿者一切

衆生平

等建立慈悲修行円満之義理智冥合之種子也故尅七生於西隣感

三生於東海也又初志者建立來化之弘誓非生現生之根源也次志者」^{1才}

説法利生之義又菩薩※1提涅槃之心地也後志者利益衆生之方便

断惡修善之妙義也亦志者一切有情之心性五輪具足種子次

志者修徳円満之躰能來所來之智徳也又同八月十五日夜言ササロロ孔礼礼云夫初孔者即天人地之三才日月星之三光也後

孔者 慈悲利物之善巧救世菩薩之心源也又志者一切衆生初生之種子赤白

二滴之兩子也後志者胎内五位之形質三十八転之能作五輪円満之正義也故秘決

文云 毎月晦日 日月冥合 時時尅尅 不断冥合 是故天地

神祇冥合 寅卯辰^{〔巳〕}_{2才}

午未申酉 戌亥子丑 二六神將 冥合時節 巨海滿干

日月冥合 以具[□]

二有本源 產生衆類 故在生死 偏当年月 曜宿好惡

男女貴賤 貧富長命

果報勝劣 月初月終 初夜曉中 隨節善惡 故撰好代

賢王治世 即以誕生

弘法大師尺云孔^レ孔者天人地之三才定惠和合之義一仏二明

王自行化他之種子

也^レ也者一切衆生生死流轉之義日月三光之躰也^{云々}又秘

決云孔^レ孔者日月

定惠者五行五蘊故貪破即日月也中五星者是五行也七星者^{※2}

有四方惣

在二十八宿也日月轉廻不斷冥合產生我等也故十二宮者即

十二神也此

神將三返廻行即称三十六禽寅卯各々具三卯也^{云々}故文云

是以法王^レ_{2ウ}

日域誕生 待世待時 撰機求仁 誕生王宮 終果宿願

興隆正法 利益三界

或口伝云胎内生救^天婆耶輪頭良波志記古土奈加良思面美

乃理野

加土於尾志彼良岐摩古度乃道入面^仁 又云宇連思耶南世々

仁[□]毛^{※3}

非師無津古土意具良乃穗加毛嘉冥乃古利奈師 又云毛呂

喪

露乃与美思喜古度仁津加惠津々加多依乃阿志喜故度於奈

佐娑礼

伝教大師胎内胎外文尺云寅陽丑陰東方北方南浮東方四智

始此智[□]

三方皆只所謂一躰也喻自相坂関一東月名東月自関西月如

云城月法界

円融方域在何所哉然則一切仏菩薩利生形者只弁才天也藥

師者[□]_{3才}

四智根源不動弁才天利物特尊也皆具陰陽故陽有陰^々有陽

云^々

心有陰陽自在無窮也即心清時^ノ天陽心濁時^ハ地陰也心強盛時

陽也

男也心柔時陰也女也眼目開合遍身上下左右皆陰陽也故曰天子

本命也月天子元神也明星自身也是以性德不變真如之義故

定在左歟

陰女地母理胎蜜性德也惠右陽男天父智金頭修德胎頭理德

也云々

一 仏法伝垂跡結偈文

欽明天皇聖觀音 皇后小姉弥勒尊 敏達天皇藥師仏 推

古女帝即普賢

用明天皇宝生尊 間人皇女弥陀仏 崇峻天皇釈迦尊 皇

后倉橋藥王土3ウ

聖德救世觀世音 后妃膳手大勢至 惠慈法師即文殊 摩

呂親王即日光

恩智千手觀世音 川上大妃地藏尊 博士学哥大世親 蘇

我天臣□□多聞天

大礼妹子持国天 大秦川勝增長天 櫛美將軍広目天 調

使麻呂金剛□

甲斐黒駒馬頭尊 上宮王子二十五 即是二十五菩薩 孫

子八人八文殊

此外王后諸卿相 上下惣在二百余 彼此各別皆方便 本

迹同心現東海

惣現果躰數十身 正談本覺各無別 我身隨類処々現 化

縁能尽帰西方

復有利縁速來化 広濟群生証妙覺 大慈大悲本誓願 愍

念衆生如一子

是故方便從西方 誕生片州興正法 我身救世觀世音 定

惠契女大勢4才

生育我身大悲母 西方教主弥陀尊 真如真実本一躰 一

躰現三同一身

片域化縁亦已尽 還帰西方我浄土 為度末世諸衆生 父

母所生血肉身

遺留勝地此廟嶺 三骨一廟三尊位 過去七仏法輪処 大

乘相應功德地

一度参詣離惡趣 決定往生極楽界

聖德太子書此碑題文奉申合善光寺如来以彼善光善佐以下

氏人等以

墨筆紙可有御返書之書由祈誓念願之間即經五更弥陀如来以

自筆御

返報アリ氏人等大悦捧其返状奉献王城云々其返状即般若

理趣經後偈文

善哉々々大薩垂 善哉々々大安樂 善哉々々摩訶衍 善

哉々々大智恵4ウ

善能演說此法教 金剛修多羅加持 持此最勝教王者 一

切諸魔不能壞

得仏菩薩取勝位 於諸悉地当不久 一切如来及菩薩 共

作如是勝說5

為令持者悉成就 皆大歡喜信受行

又上宮太子七日別時念仏以此功德奉申達弥陀如来

名号称揚七日已 此斯為報広大恩 仰願本師弥陀尊 助

我濟度常護念

二月十四日 仏子勝鬘状

本師弥陀利生院衙

金仏如来御自筆返報云

(蓮碑型印記一顆アリ)

5オ

念イ 息事イ一日称揚無恩当 何況七日大功德 我待衆生心無間 汝

能濟度豈

二月十五日 大智門状

右聖德太子七日別時念仏以此念仏三昧行業捧注札命巨勢

連奉6

念仏如来于時善光以下厥人等相議以墨筆硯紙棺置仏前令

祈請御返報之由其曉自御帳内投出御封書披見即金像御自

筆

状也成希代不思議之思即執進王城畢仍王公卿相成未曾有

之思

奉隨喜讚嘆其御返状皆以善光寺宝蔵在之云々彼此献札

返報時代不分明也但四十八歳十月十四日云々

善光寺縁起云推古天皇即位三十年壬午聖德太子信濃国金仏

像御奉口

御書状于時阿弥陀如来自筆御返報云々又以二十句碑文奉

献金像

同天皇治廿八年十月十四日云々又別時念仏奉札同廿九年巳辛

二月十四日定

又有伝文云上宮太子以書狀進達金仏御宝前惣第三度也
云々

我身大覺 化縁能尽 終帰本覺 仰願同生 上宮浄土
云々

上宮太子三妃事一小野妹子大臣女恩智姫 二蘇我大臣女
川上姫

誦此偈頌忽然向西方飛去王公卿相大驚仰礼即入紫雲之中
殘異

三膳姫也彼恩智姫者最愛第一妃利生之大士慈悲之大聖也
形者

香宮中更不知行付所其後伊与国司差專使奏狀申聞去二月
廿八日」^{6ウ}

五障婦女之身心者一子之大慈悲太子契厚生々定惠夫婦也
興法利物討辞通后妃也故蜜謂恩智妃云吾化縁將尽死葬□

夜半虛空調音樂大地震動然間万民成希代之思待明且見保
津

□」^{6オ}
汝如何^{ッヤ} 恩智姫聞其言涕泣悲淚悶絶躡地再三而蘇息泣々

靈
御岐天女即天降薰異香放光明無言斷食送五七日終成仙人

□^{奏宣} □^宣
妾必待大聖逝日入一仏生之花台終以太子御入滅抱其死

瑞非一神變利物誠以揭焉以此由奏聞推古天皇大隨喜帰依
渴仰

骸一流涕
拭淚惜名殘契後会於浄刹期值遇於西方端坐合掌合両眼

大臣卿相合掌敬礼 又国内貴賤參集備山海之珍物奉祝祭
故有勅令称大通仙宮是以帰依渴仰之類忽成二世之願參宿

無言語遷化以後経七日結偈云 一切諸法 本来常住 愚
夫顛倒

礼
奠之輩必生安樂之土^文彼妃死骸脛膾頰并翡翠髮玉簪皆以

生死流転 大聖救世 慈悲方便 機興即生 縁謝離滅
非生現生

于今奉納神庫 又有近辺寺塔号須仰寺也
彼河上妃者太子御遷化五七日之夕部命從女沐浴潔濟着清

□□^{※7}
7才

面向西方合掌端坐無言念仏即以偈頌日我身大悲地藏菩薩

今現三從五障身 皆為利生即示現 慈悲衆生弘正法

化緣亦尽歸本覺 必往上宮 安養界 此偈文三返念誦終

以薨逝面良如眠亦如咲其身甚香而滿異香宮中照光明内外

即天王臨幸運敬礼之儀卿相參集致渴仰之誠奇瑞多端存

日言語没後神交希代之往生現身正覺之臨終也即以彼死骸

平郡山本陵墓^仁奉葬埋之也^{云々} 彼姬御墓者相当法隆寺北

山本程也^{云々} 彼姬御墓者相当^{※8} 又恩智妃御墓者即伊与

箸何寺也^{7ウ}

一間人穴太部皇女者推古天王御即位廿九年^{歲次}十二月廿

一日^酉孔部間

人公主母王夢逝^{玉ヲ}于時太子臨宮内殿涕淚悲哀良久歎息

拭淚

喚叫而微言昔蘭少^{ニシテ}而喪母問母形於里人不耐悲哀母形

刻慕

亡母之質今愚臣長別母難忍悲淚母容写何見喪母之形

悲哉痛哉如何玉泉何所一去更不歸玄台何方再会無期如此

再三

悲哀悶絕良久而今有仰群臣以死骸入金棺奉埋河内国科長

御

墓即以表弥陀三尊位^{云々} 或日記云間人皇女崩御之間

上宮太子

悲母^{※9}哀叫喚而初者奉葬大和国城上郡間人墓然太子御入

□□^{8才}

後經七年任太子御遺詔奉改葬太子御廟表弥陀如来□

尊之位也吼⁷⁺太部間人臨終時偈頌文 昔在靈山名法花經

今在西方名弥陀尊 為利生故示現女身 產生法王還歸西

方文

皇女臨崩逝之時面向西方端坐合掌正念安住放光^{クシ}薰香虛空

音樂普聞宮中香花広薰凡在生之行化薨後之奇瑞寔以

希代也応化方便大聖利益誰成疑殆也

一推古天皇者三世覺王之太子四德法宮之儲君也任徃昔宿

願為流

布一乘妙法仮現皇后之身為三十四代帝王与上宮法王相議

下綸言□□^{※10}
8ウ

万郊弘仏教於八□終造立四十六ヶ之伽藍化度一千三百之僧尼凡

其行化利生方便年々興行時々奇瑞不遑羅縷一々德行難述(マ)韓

墨者哉 元興寺縁起文云等由羅宮天下豊御炊屋姫天皇推古女帝

御生年一百歳正月元日厩戸豊聰耳豊子聖德太子奉詔令記錄元

興寺并諸寺本縁其本記日 大和国城上郡城嶋金刺宮治天

下天津

国押開広庭天皇即位第七年歲次丙刀 戊午十二月十二日以百济国

齐明天皇

御使西部姫氏等奉送奏悉達太子影像并灌仏金器一具亦諸

聖教其詔日正聞仏法者既世間無上法也貴国臣專可令□□

者」9才

其時天王告諸臣等宣此異朝明王於送渡奇人形等須信敬□□※11

不可用汝等能々可計奏也其時物部尾輿大連并中臣勝海連

等

計申言我朝是照靈姬天神并天社国社一百八十神自初奉祝

祭

于今無怠奉閣天地○神達何敬他国人形乎更以不可仰崇計申

其中

蘇我大臣稻目独申他国王臣為貴我等国亦為貴可宣奏申其

儀

可奉安置何所乎大臣又申太大王古言空閑宮也須安置彼所

也

彼太大王下申者推古天王未付帝位時御名也但此時金仏并灌仏器等者奉安置本元興寺

其比國中発疾疫人民多死亡因茲物部大連等強依誤申終奉

返」9ウ

捨本難波浦畢雖然疫癘更不平除弥以発動而死人塞路辺病

人

満宮室此稻目大臣等奏言我朝未崇仏法之前疾疫更発以如

斯

更以不可依仏法之由訴申其比又自百济国差送使臣西部喜

氏

等相当欽明天皇即位第十三年歲次壬申十月十三日奉送渡善光

寺

金仏弥陀三尊并仏教等百濟国送使人等待十市郡石根堺河
奏聞

明王之詔旨仍以巨勢并大伴日子連等令対問其国使臣請迎

仏僧

経教於朝廷召集群臣等安否相尋給処朝議續紛而無叙信依

讒臣申請焼払仏像経教或埋隠土泥底又流捨難波西海其□

□_{10才}

於金刺宮之上黒雲忽引覆自雲中赤黒大鬼王出現高声□_{※12}

仏法微妙值遇亦難若信若敬悉地口満仏法破損寿福速滅王

臣愚迷

仏経焼失天王官位即滅七日必定崩滅臣卿同亡 天王聞召

鬼王奇言

忽以御悩因之終崩御 又敏達天皇治天下第八年_巳冬十月

自

新羅国送渡釈迦尊三尊其時安否異論以如斯 欽明治天下

即位

七年_丙十二月十二日送献悉達太子像灌仏器等同治第十三

年_壬十

月十三日閻浮檀金弥陀三尊与敏達天皇治天下即位八年_亥
尺迦三

尊送使臣各日皆以不審多端是以維摩会縁起文云_{北野天神御自筆文} 10ウ

至磯城嶋金刺宮御宇欽明天皇即位冬十月百濟国聖明王仏

像

幾許種来献于我聖朝議紛絃彼此成異論_{云々}奉捨置彼仏経

於難波浦上宮太子御誕生々長後奏聞于天皇造立仏殿有仰

崇

之此疾疫如昔更起物部守屋中臣勝海彼等依讒申仏僧経卷

皆以

焼失或以流失依彼逆罪王臣悉以亡_{云々} 一 小野妹子大臣遣

唐記

敬伝奏西皇帝竊風聞日域上宮太子者南岳大師之後身救世

菩薩_ホ

之變作_云 故青宮華之下広興行三宝東_(ア、イ) 月之前普利益四

生

是以請定彼先身修行之法花経等製作其義疏須詔発二諦救

□_{11才}

四生之旨依懇美以長官大札小野相公副使小札吉備宿祢遣

西

岳擬遂聖奏者早垂慈察サツ任旧法為蒙天詔驚明王之高

聞委曲難尽小野相公等至具述懷云々

仲夏上旬扶桑国朝廷牒

百济国聖明皇帝寬旅下衛

仏子上官牒南岳三綱禪室衛

早任南岳大師遺詔記文須採小野妹子臣等

金字法花經

仏肉舍利并七生相承本尊救世菩薩等事11ウ

右考先身愚臣為利生率衡山之禪室暫生日域之王宮任其弘

誓広弘月氏之妙法普利東海之利生抑隔生之後猶以難忘貴

岳之仏法興廢如何不審々々而会遙絶慕涙未乾涼燠早転

契日將至再会何日哉心事察之故牒早開般若台宝庫搜取

法花經并仏舍利等須授妹子大臣等也將又就便次調送三具

法服

等為永世之形見可令配納貴山三綱者也

心懷難述小野臣等至述情不宣謹言

仲夏上旬 仏子上宮

衡山寺三綱禪室衛12オ

紫微宮政所宣般若台三綱等所

早任南岳大師遺札開台閣宝庫搜取大師持誦

法花經等須

授度日本国大使小野相公等事

右今月三日鳳詔偁昔南岳大師遷化之後任其宿願暫感日域

之

生広興仏事偏救群生故須請迎上宮法王之先身大師修行之

法花經等之旨依令美日本国朝廷彼国王宣并上宮王令符如

斯

早押開寺庫搜取妙經等可令調伝小野相公等之旨天氣如件

首秋上旬 左相府広明12ウ

衡山寺三綱寺所衛

謹請 両朝綸綍事

先師大和尚修行法花經仏舍利等狀

右任鳳詔三綱等開寺蔵搜取彼妙經等送以授伝日本国大使

妹

子臣等既畢以此旨可令執達狀如件

孟秋上旬 衡山寺三綱等狀

進上 紫闕中台政所衙

跪請 日本国王宣并上宮法王令符事13才

右謹賜宣札先面東三拜具以披覽抑大師遷化之坐禪床

法燈之光忽消清談筵之上教訓之音永絕書案塵積數卷之

章疏徒朽紙窓月冷論匠空廢是以常礼墳墓而拭淚古

薨之花13不語又恋遺音闕袂墓林之鳥独怨故日夕悲瘡

寐歎春行夏來不凶記曆忽來今賜聖札積年之愁眉連休

三老比丘等所期也抑幸預三公之詔札剩賜三具之法服面

東咒願跪拜納正了此咒願言有即任官符宣押開南岳寶藏

搜取金字妙經并仏舍利等髓以令授伝大札小野妹子大臣等

注文別
紙載「
13ウ

仍難述愚札并以大使口狀不具謹言

上宮王院衙 中呂下旬 南山三綱等狀

敬返奏東海皇帝

右去歲仲夏宣命即勅有司仰衡山三綱採取思和尚誦持法花

經并

仏肉舍利等髓以授度小野妹子大臣等之由三綱等請返札如

此抑

大師遷化之後五唐燈將消三学之論談漸廢四衆行化空尽三

寶之

紹隆永絕然今承東海來化之聞成大師再會之思棒救世變作

之

札当悲淚恋慕之胸唯指日出之方方札大師隆化之東將又□

□
14才

速退三宝終興并以王臣等喜悦何事如之哉 依難尽天詔不

具□

日本国金闕衙 仲呂下旬 百济国紫闕殿

右此時自我朝被送大唐国珍宝等注文并天皇宣旨太子令子

又自

百济明王返報等皆以相承之処為鼠虫等被喰損少々文字失

了

然間少々有相違之字欵後以他本令授伝也

一法滿寺縁起云敏達天皇即位元年壬辰正月元日於厩戸上宮

聖德

太子御誕生其時老女自天々下盛桶水清水放妃口中抱太子直居

寢殿内忽然入白雲中是聖德變作也云々又云達摩大師之所化也14ウ

太子御沐浴之時有三井所謂千歲井天医方也赤染井養者方也春井辰巳福方也

春井水者夏極冷如水也冬如温殘二井者常如温也云々于今現在眼前也御産衣白衣又赤色云々同寺西塔銘記云太子五人乳母又有十二人

玉照左乳母大連女王安姬右乳母妹子女月益姬伊津岐乳母蘇我大臣女日益姬守乳母近江臣女唐花姬

沐浴乳母川勝女五人者分明也 殘七人略欵 二歲二月十五日平旦称何仏哉 本記云面向東方

称南無仏尺尊向東面放光說法花発心発心修行修因感果之道理也

太子問以如斯仏法伝通記文云初唱三帰依仏後称葉師仏名終□

向西唱尺迦尊之名号 其手掌舍利何粒唯一粒也是舍利者

□□
15才

御眼也自過去諸仏一至当代尺尊其右眼必伝日本国更以無

□ 故我朝号曰城天竺有左御眼号月氏云 日本記云我朝根

元者照

靈姬天照大神為日輪之形天降朝日嶽終以現神德因之称

日本国

号曰城云 定林寺尺迦本記云二歲南無仏之時仏肉舍利

三粒也云

是※14一粒者 正南無仏ノ時御舍利也安置法隆寺也今二粒

者妹子自衡山請

来也必定之也三歲三月三日桃花松葉御遊覽何所哉 今厩

戸宮辰巳

小槻宮乃後苑桃御園其跡也是我朝桃木出来始在所也西王

母

将来殖生奉祝崇神天皇是初也云 四歲御時太子独進請

答之15ウ

引孝行伝曰天有日月星照物無隱地在堅牢地神記失無余

兒背

天命隱何所仰望請答於庸須為學文之始也 欽明天皇即位十五年^{甲戌}八月十二日五經博士并醫師博士等來聖德太子八月以博士

學哥御手習又學王右軍書以此文書力顯文武之德終伏逆軍

興

仏法件文書者自龍宮奉獻黃帝^一王右軍書也太子十歲^{辛丑}二

月

千嶋蝦夷寇於奥州經年終責入三輪山辺^{云々}奇特伝云太子

取一盤石投上天良久落地蝦夷等恐怖振舌拍手進罰文還本

国此時蝦夷大將鬼師綾糠嶋廻早風足早以上五人也^{16才}

推古天皇崩御端坐合掌唱偈文

三世恒利諸衆生 普賢大士即善巧 故現日城女帝王 興

隆仏法歸本覚^{此文三反□□※15}寂滅異香放光

崇峻天王最後頌文云我身本性大尺迦 慈愛衆生即王位

示現世間無道理

終歸靈山寂光土 敏達天皇結偈文云 我身即是東土主

利生方便

日本王 隆伏逆臣弘正法 宿願滿足 還本土 此要偈三

返七返唱入寂滅^{云々}

用明天皇 最後遺詔文 一切世間本空寂 空理即有流轉

性 示悟本源

利生故 仮現人王化迷類^{云々} 欽明天皇三歲御時依詔問

頌文

衆生有苦 三称我名 不住救者 不取正覚^{16ウ}

真鳥大臣女真鳥姬産子伽耶三歲同時偈文 見我身者 癸

菩提心

聽我說者 得大智恵 知我身者 即身成仏 聖德太子二

歲二月初語言

我身大聖 仮現嬰兒 為弘仏教 仰願王臣 一心興法

広濟群生 終果

本誓^{同此}唱文 為衆開法蔵 広施功德宝 当於大衆中 説法師

子吼^文

太子入滅時文 十方世尊 智恵無量 常令世尊 知我心

行 仮令身上

諸苦毒中 我行精進 忍終不悔 膳姫最後頌文

我誓拳足 動三千界 断衆生業 而証菩提 我本^{〔因〕}地

以念仏心

入無生忍 今於世界 授念仏人 歸於浄土^{〔才〕} 17才

太子遣守屋牒文 不受我教 將為大害 即使思惟 設諸

方便

守屋返牒文 濁劫惡世中 ^{〔有諸恐怖 惡鬼入其身 罵}

詈毀辱[〔]

我等敬信仏 当着忍辱鎧文 守屋誅戮時川勝唱文

我今安慰汝 勿得懷疑懼 仏無不実語 智恵不可量 我

願既滿 衆望且足

守屋最後文 如我昔所願 今者已満足 化一切衆生 皆

令入仏道 如刀杖

瓦石 念仏故忍 我千万億土 現浄堅固身 五智御廟

者

辰巳角^{推古天皇 普賢菩薩} 未申角^{敏達天皇 藥師如來} 戌亥角^{上皇太子 救世觀音} 表三尊位

刃刀角^{孝德天皇 大日如來} 中央^{用明天皇 宝生尊} [〔] 17ウ

推古天王乃御廟初広瀬郡広瀬寺青御陵是也而依御遺詔奉

改葬河内国石川郡東条科長墓 用明天皇乃御墓初者

十市郡池上御陵也同奉改葬河内国石河東条畢 崇峻天皇

御廟十市郡倉橋下今上宮陵即是也朝墓常[〔]隨卿相八人同所

御

廟現在也 摩呂古親王御廟葛下郡当麻呂古嶽也 妹子大

臣

慕宇陀郡^{〔排カ〕}原墓也 蘇我大臣墓葛上郡有今来野名大陵

是号

小陵入鹿臣墓也 日本記云蘇我大臣墓今蘇我也[〔]云々

秦川勝連墓丹波国小野西田村墓是也 守屋逆臣河内国

18才

河殖松[〔]戌亥墓也 恩智姬御廟者伊与国保通御岐是也

河上姬廟者平郡山本北陵墓是也 日羅聖人墓幡磨国武庫

山西尾墓也

調使丸墓大和平郡龍田山辺立野坂也彼丸者太子十三歲初

為内舍人

其時丸者生年十八也天智天皇即位二年[〔]亥二月十五日出家

八十四率去[〔]云々

宮池鍛治師太子十五歲始為舍人依好殺生太子無御寵悔過

出家住法

隆寺太子薨後同五日發願無言斷食自死其基片岡下在之(ママ)

一欽明天皇陵高市郡檜隈御廟不思議在之 舒明天皇

陵城上郡押坂墓也又奉改葬河内国石河郡在之御廟於内外

常現奇特」18ウ

齋明天皇陵高市郡越智大握間山陵是也 天智天皇陵山城

国

宇智郡山在奇特云々 天武天皇陵即内裏清御原宮高市郡

橘寺西也 一八人童子問難言

第一箇嶋尊日白木不動坐万杵上愛染内居随物開閉依用上下利衆生人跡辺如何哉答云人願是也 第池辺王子日(ママ)

父者二度不合 母者再会六内

篇如何答 第三萱野王子日非輪王又非声聞辟支仏而転法輪而如仏入涅槃如何哉答云坑瓦也 第四小槻丸

日一二訓讀者九頭一尾如

大蛇而文字也世間最要知 第五葛城尊日日月早廻土毛兎鳥波不立去合ハ明々物数如何乎答一二三也 不合光々付字篇其字如何答是明文字

也

第六遠箭尊日六郡比丘者左右居シテ音声計行テ草形裸僧其住在人跡辺何所哉答即左右耳也 第七竹田王子

日八十一老人常立更不居九々

答蔓草 第八釵手尊日青蓮口堂内ニ仏坐有光明即明々無光明穴暗々人跡辺何所乎答两眼也云々 右於此八人

王」19オ

異說雖万枢依一伝秘書記之此外有口伝秘決以千金無左右

不可有口伝云々

一穴太部皇女太子抱給持言 念念念念念念 露露露露

露露露毎日七返

此七念訓云思曾ソト免於毛非思尾裳非野思影者思志人志也ノ、コ、ロ、サ、ン

又七漏訓日母連曾伏志持母連尔母連入天母連々々天古曾

故古尔母連来文クレ

又云七念七漏次念々法師於通氣天漏々法師引世無漏々法※20

師繩ニ

付天念々法師引仁是又南岳念禅比丘事也漏々法師七生

通名也

右此七念者四弘上別願救世觀音無仏世界度衆生之七生乃

他也云々

七漏者応其別力生々念力世々智力相応無断絶而感倭国之

生弘日域」19ウ

之仏法故云々 彼禅師自初生一以降每生登衡山一修行化

号日念禅一念念々

法師以如此子細七念七漏念々法師等句義也云々

一山田大臣嫡男入鹿逆臣被刎首最後謠言

我身即是大明王 仮現日域大逆臣 実助王法度群生 今

日歸入阿字門

唱此文昔者昇虚空中一差乾方遠飛入白雲終落今蘇我野森

中云々

一上宮王女三人王子御生母記文云

河上妃所生一 大兄王藥王菩薩 桑田姫藥上菩薩 老蘇王普賢菩薩 財手王陀羅尼菩薩 茨田王德藏菩薩

子一馬屋薩

女王一 日置王子金剛藏菩薩 片岡女王衆寶菩薩 遠見王子月光菩薩 20才

恩智姫產生一 菅平女王法自在菩薩 殖栗王金剛藏菩薩 春米王金剛藏王菩薩 磯部女王虚空藏菩薩 白

髮部

三枝末呂古王光明王菩薩 池上部姫自在王菩薩 ※22

膳手姫産兒一 近代女王師子吼菩薩 三枝王子宝藏菩薩 高嶋王日照菩薩 山影王子大白象王菩薩

乙姫女王一 尾張王白象王菩薩 王三嶋女王大威德藏菩薩 ※23 無刃身菩薩

上宮法王三人妃御産王子男女二十三人也

御孫王子達 山背大兄王藥王菩薩 難波王文殊師利 末呂女王弥勒菩薩 弓削王日光菩薩

雲見王子月光菩薩 佐保女王地藏菩薩

御母者来目王子女山川姫藥上菩薩 桑田姫遠箭王子妃也 桑園王藥師仏

一八木姫宝勝菩薩

乙益女王千手觀音 勝仲王十一面觀音 老蘇王子普賢菩薩 生漆王馬頭觀音 近江女准胝觀音 栗本主金剛手菩薩

一 20ウ

石山王宝月菩薩 菅平女王法自在菩薩 香子山王梅檀香仏 石川王摩利支天 武市王多聞天 殖金

栗王子剛藏菩薩 不帶妻妃常上 宮王不退淨行

王子以大悲為 春米女王金剛菩薩 道心堅固不断法花一乘 近代女王師子吼菩薩 坂田王等地菩薩

子一春井姫薩 妙音菩薩

財平王陀羅尼菩薩 山田姫尼善薩 奥山王愛染王 三吉野王不動明王 磯部女王虚空藏菩薩 不

犯一生不犯 之間無王子

茨田王德藏菩薩 甲可王持國天 佐々王增長天 三枝王子宝藏菩薩 大慈女聖觀音

大悲麻呂持國天 大智王光日天

三枝末呂古王光明王菩薩 馬屋女王鳥取王子妃 妙音姫花德菩薩 妙法姫法童菩薩

山本王法王子菩薩

白髮王花口王菩薩 長岡王安底羅大將 高松女遠企羅大將 深高王衆寶王菩薩 日置王子妃中尾姫

一石井丸安底羅大將

須你羅大將 珊底羅大將 月光王菩薩妃押坂姬
野口王—市辺女王 片岡女王 御子無之一生不犯

女王也

日照王菩薩 自五歲發心修行更以世間
振舞無之間無妻子云々 三昧王菩薩妃玉河姬 因達羅大將 波夷羅
高嶋王 遠見王—早日王—行方

大將 ※25 自在王菩薩朝香王妃
王池 上部 姫—才

摩虎羅大將 真達羅大將 招社羅大將 大白象王菩薩 一生好閑居住深山不
持妻妃仍無王子也
河内王—山本王—乙足女王 山影王子

白象王菩薩手嶋松本王妃 毗羯羅大將 導師菩薩
乙 姫 女 王—小野姫—宇陀野王

大威德王菩薩妃小野姫 宿王花菩薩 金剛手菩薩
尾 張 王—長岡王—石井丸 垂水王

無刃身菩薩妃山背姫 無量身菩薩 常精進菩薩 不休息菩薩
三嶋 女 王—早飛王—田中姫—水辺王

聖德法王廿三人王子達各々所生男女儲君以上四十八人也凡
此廿人王仁 三歟

加觀自在大勢至称廿五菩薩廿三王子各所生四十八大菩薩
合數七十一躰之

大聖也此王公卿相都集二百五十三人皆以有配躰所表

一伊与国穗津美岐仙宮者蘇我大臣御女河上妃化現大通仙

宮也即□ 21ウ

其御骨舍利等也 上彼妹子大臣者恩智姫也 云々

一太子於片岡山賜達摩詠歌云 五唐三韓大聖文殊片域無

仏法国□

道四生無菩提資糧三界五有無常住大慈大悲拔苦与楽無覺
母此意詠也

尸那照耶片岡山余飯仁飢天臥其旅人可怜無祖 私記云尸
那者五唐三

韓乃大師達摩和尚彼五台出聖靈仏跡入東海片域之心也
照耶者

和尚大聖能化尺尊九代祖師十方三世仏菩薩能生智母也然
照生死長夜耀

菩提覺月之義也 片岡者無仏世界 山余者有為奥山無常
堺也

飯仁飢者我等衆生者五道暗路迷出無智恵之資糧三界六
趣 22才

飢臥也 臥旅人者我等衆生六道四生之旅人也仏菩薩計

覺常住乃家住也 云々 可怜無母者達母来化乃昔能化乃大
聖不坐

無所憑也 伊加流伽耶富能小川乃絶波古曾我教君御名者

忘目

娑婆世界流浪堺菩提智生死幽々此死生彼無窮過去教化
示道衡山六生利生各別

私記云伊加流伽耶者 娑婆世界常没流轉之義又太子過去
久遠劫班鳩生經五□

生其心也 富小川者菩提心智惠之義也 小川者死此生彼
無 極於保□

君者過去教化示道乃心御名忘目者大唐衡山六生修行内第
六生乃時利□

方便問答心中也何忘其時名哉云々

注

(注1)「薩」にミセケチを施す。(注2)「者」にミセ
ケチを施す。(注3)旁「令」を残し虫損。「於」字か。
(注4)「書」にミセケチを施し、右傍に「由」。(注5)
「已」か。(注6)「献」か。(注7)「淨衣」か。(注8)
「彼姫……相当」にミセケチを施す。(注9)「母」にミ
セケチを施す。(注10)旁「令」残し、虫損。「於」か。

(注11)右半ば虫損、「哉」か。(注12)旁「局」残し

虫損。(注13)「不」にミセケチを施す。「不」字は重

書、下字不読。(注14)「又」か。(注15)下半ば虫損、

「唱」か。(注16)「尊」字重書す。下字不読。(注17)

「墓」にミセケチを施し、右傍に「慕」。(注18)三画

程書きかけて、ミセケチを施す。(注19)「華」字、重

書す。右傍に「花」。(注20)「居」字の上ニ「漏」字重

書す。(注21)「王」字にミセケチを施し、右傍に「三」。

(注22・25)「觀」か。(注23)「王」字右傍に見セケチ。

(注24)「嚴」か。

○上宮太子御遺言記注

○大鳥部父松子撰

○太子廿五歲丙辰春三月八日イモ妹子大臣／

○太子御前ノヲシ蹲踞ニシテ敬白ヲシテ宝塔金堂当極／樂土東門中心之御意

趣知ヲシテ以テ何ヲ正有リ西方淨土唱テ阿弥陀名号ヲ示シテ可シ

生ニ彼土ニ由テ此文ニ其意異ナリ争知ニ深意ヲ／

○太子告ツ妹子ニ向テ西方心ニ十万億ノ仏土ニ向テ西方心ニ

□□池蓮花開敷ニ過ニ此等ニ本源ノ心當極樂土東門中心此
第三句不レ得知一ノ乃重太子指ニ打妹子額一示ニ深意ニ爰妹
子ノ得レ之ニ兩眼流レ涙一〇太子垂ニ隨喜之御涙一ノ

〇太子卅五歲^刀秋八月五日吳德博士敬白ノ御舍利拾三
粒員數以ニレ何一知ニ深意一ノ

〇太子告ニ吳德ニ拾万徳円滿義一知ニ如レ此ニ可レ拜一ノ真御舍
利一ノ

太子卅六歲^知七月□ノ金銅救世菩薩左足踏ニ開敷蓮華一□
ノ知深意一ノ

〇太子□惠慈ニ蓮華□□ノ惠慈法師流ニ涙一ノ

〇太子卅七歲^辰太娘^辰后問ニ太子一曰不レ得レ拜ニ現ノ在
仏一太子奉レ拜ニ三世諸仏一此宝塔ノ書置無レ覺一ノ

〇太子曰^ノ尤吾^ハ隨順^セ如レ此ニ可レ問^シ静^ニ意^ヲ聞賜^キ過去^ト云
現在云未來云雖ニ言異ニ但一念ノ之間無念^{ナリ}后大悦知^ニ深
意ニ互^ニ歡喜^シ御ノ涙不^レ堪^ニ云一ノ

〇太子卅二歲^癸十一月十七日百濟国□問尼ノ講法堂
八間將^マ凡眼^ニ七間^ナ如何知^ニ此深意一ノ

〇太子告^玉善信^ニ離^テ肉眼^ヲ真^ニ三身^ノ頭^ヲ彼時宛^ニ問^ニ八間云一ノ

〇理頭名為觀自在尊ノ

〇智頭名為勢至菩薩ノ

〇心頭名為無量壽仏ノ

〇太子卅一歲^壬百濟国阿佐敬^白ノ宝塔第一露盤
不^レ隱^ニ露^ニ無^レ覺^ノ

〇太子告^レ阿佐^ニ彼^レ譬喻表示^シ人皆在^ニ法性一ノ此法性不^レ
摧^ニ擲^ニ打^ニ水^ヲ火^ヲ不^レ忘^ル故^ニ宝塔ノ第一露盤誓^手鏤^レ

金一表ニ遺法興滅相一ノ

〇惠慈法師日ノ

〇四方皆仏土何以西方一切衆生期^シ往生^ニ候ノ太子告^レ西文
字者點有^レ四方^ニ内納^レ八^ニ上^ニ戴^クノ一^ノ四角^ノ八方^ノ皆是^レ歸^レ一^ノ
故^ニ

〇己上七大事畢ノ

〇太子卅歲^辛二月廿五日蘇我大臣拜日ノ諸仏菩薩奉^ル
供養^ニ如何成^ニ真^ニ供養^トノ太子告^レ大臣^ニ供養有^レ二種^ノ無^レ
眼^ニ以^テ才^ヲ宝^ヲ致^ス供養^ヲ召^テ福^ヲ因^テ明^レ眼^ヲ以^テ真^ニ蓮花^ニ獻^ル

仏ニ此時眞^ニ拜^ニ如來^ニ而一切満足^{セシ}／

○太子卅六歲^丁九月十五日^ノ／

○推古天皇自^リ八月五日夜^ニ至于今日^ニ唱^ハ念^フ念^フ佛^ヲ功德難^シ

思量^シ朕前^ヘ汝具申^テ承^テ勅^ヲ太子曰念^フ佛名号本曰無念此

時天皇^キ知^ル法深意^ヲ女帝垂^テ御淚太子同御前^ニ流^ス御淚^ヲ

然而後^チ太子重曰今日眞^ニ往生^ス／

○太子三歲^甲桃花一旦榮物松葉万年々々^ノ／

○此御詞卅八歲^巳二月八日^ノ／

○奉^レ始^メ天皇太娘^后蘇我大臣^ノ吳德博士^ノ大鳥部

父松子^ノ妹子大臣^ノ惠慈法師^ノ百濟阿佐^ノ百濟善

信尼^ノ太子說^ニ彼深意^ニ聽^ク聞^ク已々皆知^ル佛法之不^レ

可思議^ニ此時太子垂^テ隨喜御淚^一曰^ク／

有連新志々々々々^ノ／

如^レ吾皆成^ス／

○太子誓^テ曰此遺言狼不^レ可^レ伝^ニ非器^ノ假令雖^シ為^リ

器量^ニ濫^ス不^レ可^レ披^見敬^テ奉^レ累^中陛下并^ニ御世^ニ

玉^ヲ治^メ天下^一皇^上為^レ守^一令^ニ勿^レ二世絶^一／

又曰^ク／

○弘法大師曰雖^シ与^ニ千金無^レ眼^ニ不^レ可^レ伝^ニ御遺言

記^シ不^レ然者雖^シ為^リ未代^ニ可^レ加^ニ冥^ノ盧^ノ罰^ニ可^レ秘^ス

努^ム々々^ノ／

○上宮太子御遺言記注^{〔サ〕}相承^ス／

太娘后^ノ吳德博士^ノ

○上宮太子^ノ蘇我大臣^ノ

妹子大臣^ノ

○惠慈法師^ノ

○推古天皇^ノ

大鳥部父松子^ノ

○押坂大兄^ノ皇子弟停王^ノ

○舒明天皇^ノ

○皇極天皇^ノ

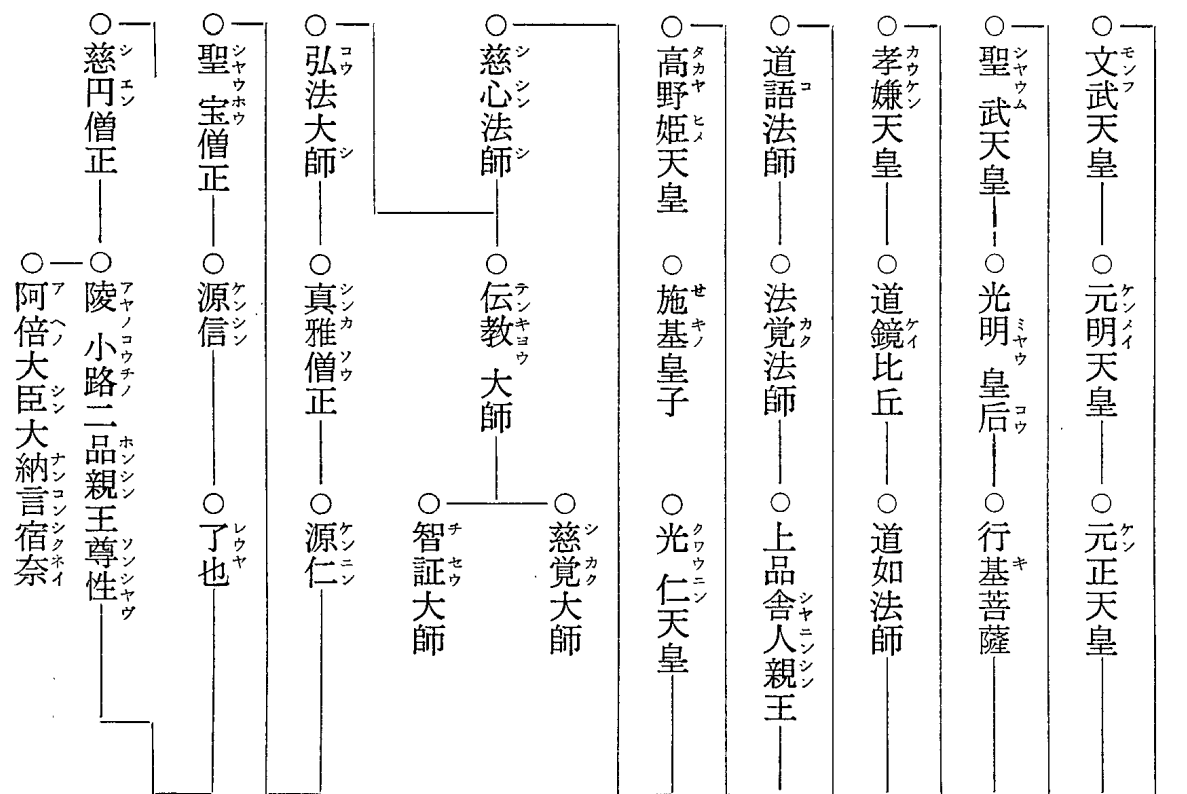
○孝德天皇^ノ

○齋明天皇^ノ

○天智天皇^ノ

○天武天皇^ノ

○持統天皇^ノ



○中納言広庭

同阿倍 (朱) サウくコレヲリヤクスル也

○当寺絵所阿倍大臣九代之子孫也

ワカテウノサ大臣之ハシメ也推古天皇御時シ〇ラヲ

セメル、時大將タリ〇当寺秘事口伝令ニ〇伝受ニ云々

此七大事子孫一人令ニ相伝ニ但依ニ有ニ御

器用御所望ニ以ニ別議ニ奉レ授ニ彼方ニ就レ中

御往生後者可レ有ニ本所御返ニ有ニ御誓文ニ云々

応永卅年癸六月廿九日 書写之畢

絵所上座覺慶(花押)

(注1)「学」か。(注2)左傍「□□□□テ」。

*

〔追記〕

(1) 身延文庫には、別に筆跡の相似た「太子伝」(釈思託撰「上宮皇太子菩薩伝」を附す)がある。末に「……」

南無三国伝灯大導師上宮太子承授／灌頂仏子某敬持

三反／種々供物等可在之^云々々面授口決能々守機伝之^{本云}之血

脈等別在之^未／康永二年^癸三月廿四日伝受沙門雄慶」と

あり、首欠かと思われる。後欠の可能性のある本書と

の関わりは、今、俄かに決し難い。

(2) 高野山宝亀院蔵『上宮太子御遺言記註』一軸は見当

らぬ由、『水原堯栄全集』十一卷(頁十二)に記す。